

## マルコによる福音書 8:34～9:1 「自分の命はどこにあるか」

2025年3月2日(主の日)

先週の月火と、全国連合長老会の宣教協議会という勉強の会にでかけてきました。静岡くさ深教会を会場でした。そこでハイデルベルク信仰問答について学びました。この信仰問答を翻訳し、深く味わっておられる他教派ですけれど、同じ長老教会の信仰を持つ教団の神学校の校長であられる吉田隆という方が、この信仰問答の歴史と、教会の信仰の養いにどれほど意義があるかを語ってくださいました。正直言いまして、会に参加する前は、あまり乗り気ではありませんでした。他にもとりくまなくてはならない教会の文書、信仰告白やその他のものがたくさんあるからです。今は、十戒について考えなくてはならない、また準備会では教団信仰告白を扱っています。その中には使徒信条が含まれ、今、全国連合長老会では1890年日本基督教会の信仰告白をとらえなおすことが話題となっています。ハイデルベルクは私の中では優先順位が低かったのです。けれども、今回講演を聞きまして、いかにこの信仰問答がわたしたち改革長老教会を豊かに養ってきてくれたか、そこに語られている恵みを改めて知らされまして、じっくりとりくみたいという思いになりました。信仰問答ですから、もともとは青少年の信仰教育のために書かれたものです。けれども、一つ一つの問いと答えは大変深いもので、若者だからやさしくしてあげよう、などという手加減は一切みられません。全体としては、罪の悲惨、罪からの救いの喜び、救いに対して全生活にわたる感謝という構成になっています。そして問一が決定的です。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは、何ですか。」これが、自分の人生について、自分について考えるときに第一に考えるべき問いだということです。生きるにも、死ぬにも、つまり命のことを考えているのです。そして、生きるにしても死ぬにしても、人生において、大切なことは目標や意味以前に、慰めを問うのです。わたしたち人間の人生には慰めが必要なのです。答えはこうです。「わたしがわたし自身のものではなく、身も魂も、生きるにも、死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです」。

生きるにも死ぬにもというのですから、命が問題です。本日の箇所にも命という言葉があります。新約聖書で命という時、単に生物としての生命を意味する言葉もありますが、今日のような箇所の場合、それは、人間として生きているという命の他にいろいろな意味があります。人生、日々の生活、魂、自己といたりしますが自分自身、自分そのもの、という意味もあります。主イエスは、あなたはどうか生きるか、と問い、またあなたがあなたであるために最も大切なことはなにか、と問われるのです。「あなたが何のものにもかえられない。あなたには本当にあなたらしく、自分自身の命を生きてほしい」。そう願ってくださる主イエスは、そのわたしたちの命は、ご自分に従うところにあるのだ、とおっしゃ

やるのです。

ここまで、このマルコによる福音書からわたしたちが聞いてきたことを少しだけ振り返ってみたいと思います。主イエスが、弟子たちに、「あなたがたはわたしを何者だと思っているか」と問われ、ペトロが「あなたは、メシア、キリスト、救い主です」と正しく答えました。けれども、その理解は全く不十分であり、そこで主イエスが言われた受難予告「わたしは多くの苦しみを受け、指導者たちから排斥されて殺される。そして三日の後に復活する」とおっしゃったことを受け入れることができず—つまり、救い主とは絶大な神の力をもって、イスラエルの民の敵であるローマから独立させてくれる、と期待していたのですが—、受け入れることができず、主イエスをたしなめてしまうほどでした。「イエスさま、そんなめっそうもないことを言ってはいけません」。主イエスは、ペトロが、自分の思い通りの救いを求めているだけで、主イエスがおっしゃったことを受け入れていない姿をみて、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」とお叱りになりました。この出来事の前から、弟子の無理解が問題になっていました。自分の願望を眼の前の主イエスに映し出し、神がなさろうとすることを見ていなかった、主イエスという救い、恵みがすでに示されていることを理解しなかったのです。まあしかしたしかに、眼の前の、病気を癒し、奇跡を起こし、罪人を赦す権威をお示しになり、力強く神の国を語るこの自分たちの先生が、まさか権力者に殺されるなどということを受け入れる方が難しかった、ということもわからなくはない、とも思います。救い主というのは、わたしたちだって、悪をほろぼし、病気の人を癒し、困っている人を助ける、そのような力強い人を救い主として求めているのであって、何も悪いことをしていない自分に災害が降り掛かったり、自分ではないにしても、戦争で弱い人たちが命を失うのを放っておいているのが神だ、というのであれば、それはなかなか受け入れがたいと思うのです。もちろん神は、そのようなときにもにいて慰めを与えてくださる神ではありますが、人の思いによって、つまり自分の都合のいいように、奇跡的に病気が治ったり、台風が避けてくれるような、そういう神ではあられないのです。そこで、主イエスはペトロに、人の思いではなく神のことを思う道を示されます。主イエスに従う道です。ペトロを叱った時、主イエスは「引き下がれ」とおっしゃいました。これは、「わたしの後ろに」という意味の言葉です。引き下がれ、というのはあっちへ行け、というのではなく、わたしの後ろに行きなさい、つまり従いなさい、という言葉なのです。ですから、主イエスはこのあとに「わたしに従いたい者は・・・」と話をお続けになったのです。

さてそこで、「主イエスのため、また福音のために命を失う者は、それを救う」と主イエスはおっしゃいました。聞きようによっては、大変厳しい言葉に聞こえるし、あるいは、怖い言葉に聞こえるかもしれません。実際、厳しき、恐ろしきが語られていると思います。従いなさいだけを聞くと、大変なことのように聞こえるかもしれませんが、このことをよく理解するために、まず、主イエスがおっしゃった結論から聞きたいと思います。主イエ

すがここでおっしゃっていることの結論、それは「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があらうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」という言葉だと、わたしは思います。一人の人間の命は地球より重いかどうか、などという議論がなされたこともありますが、そういう理屈ではありません。たとえ全世界を手に入れても、全世界はおおげさとして、億万長者になったとしても、といってもいいかもしれませんが、死んでしまったら何の意味もないじゃないか、という人生の教えが語られているのでもないのです。主イエスがお語りになっているのは、わたしたちの命がどれほど尊いか、ということです。神の眼に、あなたは価値あるものだ、そうおっしゃる。ほかでもない、主イエスがそうおっしゃってくださることが決定的なことなのです。「あなたは命を失っていないか、命を失う、滅びへの道を歩んでしまっていないか。わたしはあなたの命を救いたいのだ」そう主イエスは語りかけてくださるのです。

この命の救いへと導くために、主イエスは「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」とおっしゃいました。主イエスご自身がおかかりになった十字架についてではなく、弟子たちに、わたしたちに対して十字架という言葉が使われることはここくらいしかありません。けれども、何も特別なことはないと思います。重荷を負いなさい、いえ、十字架ですから、命をかけるほどの重荷を負いなさい、とおっしゃるのです。みんな、なんらかの重荷を背負って生きていると思います。命がけとまでは言わなくても、人生をかけて、命をけずるようにして仕事をしている人がいるでしょう。人生のほとんどをそれに使っている人ならいくらでもいます。社会における仕事とはそのようなものです。家庭で家族のために働くことだって、こどもために家事をし、仕事をし、教育をするのも人生の多くのものをささげることです。病気の家族を支えることは大変な重荷であろうと思います。もちろんそのような重荷を負っているわたしたちとともに神はいてくださる、そう信じますけれど、ここで、この十字架を単なる人生の苦勞と考えてしまっては主イエスの言葉の意味を見失ってしまうと思います。わたしは仕事でこんな大変なことをやっている、家のことでこな苦勞をしている、それとならべて、教会では信仰生活ではこういう大変さがある、とおなじようにならべてしまうことがおこりかねない。けれども、主イエスは「わたしに従いたい者は」とおっしゃったのです。主イエスに従おうとして、従っているがゆえに、背負わされる十字架があるのです。主イエスに従う中での十字架をみたとき、そのとき、他の苦勞もまた、主イエスに従う光の中で、十字架となるのではないのでしょうか。

主イエスは、ここで「わたしのため、また福音のために命を失う者はそれを救う」ともおっしゃいました。この少し後に、同じように「わたしのためまた福音のために」とおっしゃる箇所があります第10章です。そこでは、「家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者は」とつづきます。この世で最も大事にしているであろう家畑などの財産、そして何よりも家族を捨てるならば、と主イエスはおっしゃるのです。今日の箇所では「自分の

命を失う者は」です。ありとあらゆるものを捨てなければならないような厳しさがあります。しかし、わたしたちがあらためて家族を見つめるとき、その関係はかならずしも正しいものばかりではない、これまでいつも正しかったわけではないことに気付かされます。時に、家族を利用することがあり、憎むこともあります。あるいは、よかれとおもって傷つけたり、縛ったり、いらぬ期待を背負わせたりすることがある。「あなたはこういう人間だ」、「これがあなたの行くべき道だ」、そういう言葉は「呪い」と呼んだりしますが、一見心配しているようで子供を長い間縛ることになります。「あなたはこんなこともできないのか」、「あなたはこの程度の人間だ」というのならますますそうです。そこから回復するには、関係をとりもどすには、一度捨てる必要があります。その意味は、家族を絶対的なものにするのではなく、一度外に立つ、主イエスがいてくださるところから見つめ直すのです。本当に人を愛する、というのは主イエスにしかできないからです。その時始めて、新しい、神の愛に根ざした関係を作り直すことができる。救われるのです。自分自身の命もまた、自分が思う人生から離れて、主が望んでおられる自分を見つめることができるはずです。その時、わたしたちは自分の命を手放します。主のものになるのです。そうすることで、仕事でも家庭でも、持病でも家族の病気でも、主イエスに従う者として見つめ直すことができる、その時始めて、問題が解決するのではなくて、主がお与えになった十字架として背負うことができるようになるのではないのでしょうか。おそらく赦しの問題が一番大きいと、聖書全体は語っていると思います。ずっと赦せないでいる人がいます。縁を切って、死ぬまで関わらなければいい、そう思っていたとしても、主イエスがおっしゃるのです。その人もわたしが愛した子だ、あなたが赦すところにあなたがほんとうに生きるべき道がある、と。赦すっていったいなんなのか、そんなことできるのか、それは主イエスに従っている者だけが逃げずに問い続けることができる問いです。解決ではなくて問い続けること、それが主イエスに従う者の十字架ではないでしょうか。

この話のほったんとなったペトロは、この後、主イエスがついに捕まってしまった時、「こんな人知らない」と3度いいます。「わたしとわたしの言葉を恥じるものは、わたしも終わりの日にその者を恥じる」主イエスははっきりとそうおっしゃいました。ペトロは、主イエスの弟子であることを隠し、主イエスを知らないといいました。主イエスを恥じたのです。差し迫った自分の身の危険を避けるために、問うことをやめてしまった。「ここで、主イエスに従う者は何をすればよいのか」その問いを捨てたのです。鶏が泣いて、ペトロは自分が裏切ったことに気づいて泣きました。けれども、ペトロは救われました。「お前はわたしの名を恥じた。終わりの日にわたしはお前を恥じる」と主イエスはおっしゃらなかったのです。復活した主イエスはペトロに会い、「あなたはわたしを愛するか」と問われ、「愛しています」と答えたペトロに、ご自分の羊を飼うようにとお命じになりました。教会をおまかせになったのです。ペトロは赦されました。

本当であれば、主イエスを恥じてしまったペトロは自分を失い、裏切り者として恥の人

生を歩まなければならなかったはずで、人から後ろ指をさされ、なによりも罪悪感の中で生きていかなければならなかった、あるいは命を絶ってもおかしくなかった、滅びなければならなかったはずで、けれども、そうはならなかった。自分では自分の命を買い戻すことなどできなかつたはずなのに、主イエスがはらえないはずの金額の代価をしはらってくださったのです。それが主イエスの十字架のできごとです。背負いきれない自分の十字架を、主イエスはすべて背負ってくださいました。

ハイデルベルク信仰問答の問1の答えは実はもう少しづきます。「わたしがわたし自身のものでなく、身も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主 イエス・キリストのものであることです。」続き「この方はご自分の尊い血をもって わたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解き放ってくださいました。また、天にいますわたしの父の御旨でなければ 髪の毛一本も頭から落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの益となるように働くのです。そうしてまた、ご自身の聖霊によってわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜ぶように、またそれにふさわしいように整えてもくださるのです」。最初からこの答えを読むだけで、今日の主イエスの言葉の説き明かしになりそうな豊かな恵みの言葉です。ご自分の尊い血をもって罪を完全に贖ってくださった、聖霊によって永遠の命を保証してくださり、これからこの方のために生きることを心から喜ぶように整えてくださる。これが主イエスのもとに命があること、主イエスに従うところにある命のすべてです。

9：1に不思議な言葉が語られます。「ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なないものがある」。命がなにか、ということ今日聞きましょう。生物としての命ではありません。自分が本当に自分として生きる命は、主イエスに従う中にある、自分が主イエスのものである、主イエスの中にいさせてもらうことがまことの命です。ですから、ここでいう死も単なる生物としての死ではありません。主イエスから離れてしまうことです。そして主イエスが「死なない」とおっしゃる。神の国がここに現れるまで死なない、命を保つ、とおっしゃる。それはすなわち、主イエスの恵みによって、神の国である教会につながっているわたしたちにほかなりません。